The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	埴輪生産の変遷と諸段階 ： 中期後葉の再検討を中心として
Author(s)	木村, 理
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 2019, 53, p. 61-87
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81482
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

埴輪生産の変遷と諸段階

――中期後葉の再検討を中心として――

木村　　理

キーワード：古墳時代／埴輪／生産／政治権力

はじめに

墳墓が有力者同士の関係性を示す手段として用いられた古墳時代において、そこで使用された各種器物の生産や供給・配布もまた政治権力と結びついて秩序立てられていたとみられる。中でも墳墓外表に立て並べられ、墳墓祭祀や墳墓景観の規模・質の差を現出するのに寄与したと考えられる埴輪には、生産から供給にいたるまでのプロセスに政治権力の動向が反映される可能性が高い。本稿ではこうした視座の下、古墳時代社会の転換期の1つである中期後葉（TK208～47型式期）を主たる対象として出土埴輪を分析し、埴輪と政治権力の結びつき方を復元する。そして、それを踏まえた上で通時的に埴輪と政治権力の関係性を概観し、段階設定を行いたい。

第1章　研究略史と本稿の射程

1. 研究略史

通時的に埴輪生産の変遷を捉える試みは高橋克壽の「埴輪生産の展開」（高橋1994）に始まる。地域と時期に即した生産の実態をマクロな視点で分析した高橋は、個別的生産に始まる埴輪生産が、4世紀後葉から5世紀を経て膨大な需要に応えるべく生産体制を拡充化させ、6世紀にいたり遠隔地への供給を実現させるという図式を想定し、そこに「埴輪自身、ひいては埴輪を

立て並べる古墳そのものの性格の変化」（高橋1994：p.44）を見て取った。こうして提示された枠組みは、埴輪の変化を歴史的コンテクストの中で理解した点で説得力を有しており、今なお多くの研究の依り代とされている。

一方でこれにかんしては近年、見直しの必要性も説かれている。前期後葉の段階で大型古墳を拠点とした生産が早くも始まっているという指摘（廣瀬2007、三木ほか2015、宇野2018）、逆に後期においても個別的生産が行われる事例が認められるという言及（和田2005など）は、多様な生産体制の実態を明らかにし、部分的ながら高橋のモデルを修正していった。

さて、その中で東影悠や廣瀬覚による研究（東影2018、廣瀬2019）は、再び通時期的な埴輪生産モデルを提示した点で意義深い。生産体制と様式から各時期の特徴把握を試みた東影は、前期後葉に出現した拠点的生産が中期を通じて見られる一方、後期になると一定の地域性の中に異なる系統の埴輪が点的に存在すると述べ、「各地域に根差した生産のほか、被葬者の出自や系譜と関連する生産・供給が存在した」ことを想定する（東影2018：p.44）。また、埴輪様式については造出や堤の整備に伴い形を変えつつも大型前方後円墳を中心として展開したこと、主要な形象埴輪の樹立位置が墳丘から堤上へと移動したことをもって中期後半と後期前半の連続性を評価する。このように、大型前方後円墳を中心とした埴輪生産、様式が形を変えながらも継続して各地に強い影響力を与えたという点が見て取られたのである。

たほう、廣瀬覚も後期にいたるまで一貫して埴輪は首長の影響下にあり、製作される埴輪の段数構成に秩序が見られると指摘する。中でもTK23・47型式期は段数構成秩序の再編が行われ、序列づけが緻密化する、そしてそれが広域に及ぶようになる時期であると位置づけた。こうした廣瀬の見解は、当該期の王権の伸長過程とも整合的であり、政治権力が外表施設の差配に強く影響を与えた姿が復元される。なお、これに関連していわゆる「雄略朝」期において段数構成が刷新され、秩序の強化が図られるとした山田俊輔による研究もある（山田2008）。

2. 本稿の射程

この状況を踏まえた上での本稿の目的は、中期後葉の埴輪生産の再検討を通じて中期前～中葉や後期前葉との違いを明確化し、埴輪生産の諸段階を設定することである。

これまでの研究では、埴輪生産が首長層から自立していくか否かはさておき、両者の関係が一定もしくは一方向的に変化するという理解が一般的であった。そして、中期後葉の位置づけをめぐっては、TK23・47型式期やV群埴輪を画期とすることが指摘されてきた。一方で筆者は、その直前の時期であるTK208型式期を含めて、段階的な生産体制の変遷を読み取る必要があるという立場に立つ（木村2018a）。このような理解に基づいて、以下では中期後葉の埴輪生産が、その前後の時期とどのように類似し、異なるのかを明らかにし、埴輪生産と政治権力との関係性の変遷に諸段階を見出したい。

第2章　中期前葉～中葉における埴輪生産

中期後葉の特質を相対化する上で、その前後の時期の様相をおさえておく必要がある。本章では、前方後円墳が大型化する中期前～中葉（TG232～ON46型式期）に絞って埴輪生産と器種組成・配置を検討しよう。

1. 埴輪生産

当該期の埴輪生産は、地域（古墳群）内の盟主墳を中心に一元化される傾向にあり、百舌鳥・古市・佐紀・馬見古墳群に加えて三島地域や久津川古墳群などが例として挙げられる。

ただし、ミクロに見れば拠点的な生産体制の整備には時期差があったというのが筆者の主張点の1つである。具体的にいえば古市・佐紀古墳群では百舌鳥・古市古墳群に先駆けてそうした体制が整えられたとみられるのである（木村2019b）。この点は古市・佐紀古墳群の造営勢力がいち早く勢力内部で

の結びつきを強め、かつ権力生成の方法として墳墓外表で行われる祭祀を高く価値づけ、そこで用いる器物を生産レベルから管理することを企図した状況を示すのではなかろうか。王権内部も足並みをそろえて埴輪生産体制が拡充化したとは限らない点に注意が必要である。

さらに、大型前方後円墳に対して組織された工人集団が、中期に至って即座に古墳群内の全ての古墳に埴輪供給を行ったわけではなく、小規模古墳からまず始まって次第に供給域を広げていった点に筆者は注目している。中期前葉の古市古墳群や佐紀古墳群において陪冢や小規模古墳に大型前方後円墳と同様の特徴をもつ埴輪が供給される一方で、中規模古墳には異なるものが供給されることはそれを物語る（木村2018b）。中規模古墳をも組み込んだ一元的生産は、大仙陵古墳に代表される中期中葉の百舌鳥古墳群で実現されたのである（木村2019a）。有力者相互の政治・経済的関係の強化や工人集団の成熟に基づきつつ、墳墓に必要な器物の生産が段階的に大型前方後円墳を中心とした体制下に置かれていく様を示していよう。以下では、円筒埴輪の段数構成や形象埴輪の器種組成、配置を分析することで供給古墳と有機的な関係をもつ当該期の生産体制の特質を浮き彫りにしていきたい。

2. 墳墓階層と埴輪秩序

例として誉田御廟山古墳併行期を検討すると、墳墓階層ごとに段数構成や器種組成の使い分けがきわめて整然と行われていたことがわかる。すなわち、最大規模の誉田御廟山古墳を頂点として7条8段、6条7段、5条6段、4条5段、3条4段、2条3段のものが各地で墳丘規模・形態の違いに基づいて明確に使い分けられているのである（表1）[1]。無論、これは全て王権中枢部の一律管理によって決められていたわけではなく、地域の小規模古墳にいたっては同じ地域内の盟主墳に規制される形をとっていたであろう。しかしながら、地域を越えて広域的に段数構成をめぐる秩序が確立され、墳墓階層に応じてかつてないほど多様な埴輪が製作されたことは重視できる。また、百舌鳥古墳群の百舌鳥御廟山古墳（前方後円・203m）や古市古墳群のはざみ山古墳（前

表1　中期前～中葉における近畿地方の段数構成

時期	古墳名	形態	規模	地域	7条8段＋	7条8段	6条7段	5条6段	4条5段	3条4段	2条3段
TK73～TK216	誉田御廟山	方円	425	古市	■	■	■				
	ウワナベ	方円	260	佐紀			■				
	室宮山	方円	238	大和					■		
	太田茶臼山	方円	226	摂津					■		
	百舌鳥御廟山	方円	203	百舌鳥			■				
	久津川車塚	方円	180	南山城					■		
	心合寺山	方円	160	河内					■		
	はざみ山	方円	103	古市				■			
	茶すり山	楕円	78×90	但馬						■	
	小山	方円	78	玉丘						■	
	私市円山	円	70	丹波						■	
	三吉石塚	帆立	62	馬見						■	
	鞍塚	帆立	51	古市						■	
	弁天山D2号	方方	40	摂津						■	
	離湖	長方	34×43	丹後						■	
	木立	帆立	34	大和						■	
	山道東	円	27	南山城						■	
	芝ヶ原9号	円	25	南山城						■	
	堂山1号	円	25	河内					■		
	段上3号	方	13	河内						■	
	段上1号	方	12	河内							
	小倉東E1号	方	12	河内							■
	総持寺7号	方	12	摂津							■
	中坂2号	方	10	丹波							■
	福垣北4号	円	10	丹波							■
	段上4号	方	7＋	河内						■	
ON46	淡輪ニサンザイ	方円	180	和泉					■		
	杉山	方円	154	大和					■		
	黒姫山	方円	112	河内			■				
	銭塚	帆立	71	百舌鳥						■	
	大和11・12号	方円	65	佐紀						■	
	茶臼塚	方	28	古市					■		
	高山2号	円	28	馬見						■	
	上人ヶ平5号	円	25	南山城			■				
	陵南赤山	円	20	百舌鳥						■	
	市尾今田2号	方	18	大和						■	
	上人ヶ平14号	方	8	南山城						■	
	段上2号	方	7＋	河内							■

方後円・103m）と、三島の太田茶臼山古墳（前方後円・226m）の事例のように、百舌鳥･古市古墳群では、周辺地域の大型古墳より規模が小さくても、より大型の円筒埴輪を用いる傾向にあるなど王権中枢部の相対的な優位性がうかがえることも見逃せない。各地の段数構成は盟主墳を頂点として規定されつつも、百舌鳥・古市古墳群の大型古墳を頂点とした広域秩序を揺るがすものではなかったと考えられるのである。

また、この状況は形象埴輪の器種組成でも追認できる。全面調査が行われていない古墳や削平された古墳も多いため組成全体の把握は困難だが、外堤

のみでも家、蓋、靫、甲冑、盾など多様で豊富な形象埴輪が出土する誉田御廟山古墳に比して、小規模の越中塚古墳（円・40m、古市）や土師の里8号墳（方・12m、古市）では器種が少ない。さらに、善ヱ門山古墳（方・28m、百舌鳥）のように陪冢であっても小規模古墳は形象埴輪を顕著にもたない場合もある。加えて、これら小規模古墳においては、堤や造出を備えないことも多く、形象埴輪の大部分は墳頂部に配置されていたと推定する。なお、三島地域や北近畿地域など周辺地域でも同様の傾向が見出せる。

このように当該期は、円筒埴輪は墳丘規模や形態に応じてそのサイズ差が明確に作り分けられ、形象埴輪は墳丘構造の複雑度に比例する形で器種組成に差異がもたされていた。すなわち、墳丘規模や形態の違いに応じてきめ細やかに埴輪の質や量・サイズが使い分けられていたのである。無論、陪冢などはこの限りでないものの、器種組成や量・サイズ差によって現出される墳墓祭祀や墳墓景観の違いが階層差と強く結びついていた可能性を指摘できる。

3. 小結

ここまで埴輪生産および器種組成の把握につとめ、両者が大型前方後円墳を中心として整然と秩序立てられていたことを述べた。例として誉田御廟山古墳併行期を検討したが、同様の状況は大仙陵古墳併行期でも確認しうる。

また、この状況をさらに遡って前期後葉と比較すると、その特質を浮き彫りにできる。すでに指摘されるように、近畿地方に限れば、前期後葉には地域の盟主墳を中心とした拠点的生産体制が整備されていたと想定できる。この点は中期前～中葉と同じだが、一方で前期後葉においては墳丘規模が小さくても大型の円筒埴輪を有し、豊富で精緻な形象埴輪を並べる古墳が存在するなど、円筒埴輪の段数構成、形象埴輪の質・量の差が必ずしも生み出されていない。このことからすれば中期前～中葉の埴輪の特質は、大型前方後円墳を中心とした拠点的な生産体制の整備に加えて、墳墓階層に基づいて段数構成や形象埴輪の質・量差が設けられる点に求められよう。これはかつてな

い規模の前方後円墳が築かれ、墳墓を通じて有力者同士の関係性が一段と明瞭に示されるようになったことと無関係ではあるまい。こうした状況は後述する中期後葉と比較しても一目瞭然であるが、ここではひとまず埴輪が墳墓階層に応じてきめ細やか、かつ整然と規定されていたことを当該期の特質として挙げておく。

同様の理解はこれまでも述べられてきてはいるが、改めてその実態を整理したものである。ただし、新たな視点として、このようなあり方が、まず古市・佐紀古墳群において企図されたこと、その中でも小規模古墳に強く関与する方向性が模索されたことは強調できる。さらに、大型前方後円墳が連続して築かれる中でも、例えば古市古墳群で仲津山古墳から誉田御廟山古墳、佐紀古墳群でコナベ古墳からウワナベ古墳の築造にかけて、工人集団や製作される円筒埴輪に差異が認められる点も重要だろう。これは、両古墳群が新たな形態の埴輪を生み出す推進力をもっていたことを示すにほかならない。人物や動物といった新たな形象埴輪の初現例が古市古墳群に集中するのもこれに整合的で、埴輪様式の刷新・整備に古市古墳群と佐紀古墳群が強い主導性を発揮する存在であった可能性はきわめて高い。

第3章　中期後葉における埴輪生産

1. 埴輪生産

大型前方後円墳の築造停止に伴って、百舌鳥・佐紀・馬見古墳群では埴輪生産が分節化し、製品・技術の獲得は古墳ごとに行われるようになるが（木村2019a・b）、これは大型前方後円墳が築造される場合でも同様である。以下では、古市古墳群を中心に、周辺地域へも検討を広げていこう。

まず、市野山古墳併行期の古市古墳群においては、大型前方後円墳である市野山古墳（前方後円・230m）と小規模古墳の間で同じ工人集団が動員される場合がある一方で、両者でつくりの異なる埴輪も一部では用いられ始める。当該期を境として、小型品の製作工程が急速に省力化されることや、大

型前方後円墳では卓越しないⅤ群埴輪が小規模古墳に対して供給されることなど、小規模古墳の埴輪が独自の動きを見せるのはその例といえよう（木村2018a）。

この傾向は次時期になるとより顕著になる。すなわち、岡ミサンザイ古墳（前方後円・245m）の埴輪はⅣ群埴輪が85.4％、Ⅴ群埴輪が14.6％と、Ⅳ群埴輪が主体をなすのに対し、同時期かつ中小規模古墳の軽里4号墳（前方後円・18m）や下田池古墳（円・25m）、今井塚古墳（円・30m）、矢倉古墳（帆立貝式・30m）に供給されるものは、ほぼ全てがⅤ群埴輪なのである。

このように、中期後葉は大型前方後円墳と小規模古墳の間で、用いられる埴輪のつくりの違いが最も顕著になる時期であったと指摘しうるが（図1）、小規模古墳同士でも、例えば林10号墳（方・20m）と同13号墳（方・規模不明）の間には同工品が確認できないほか、青山7号墳（円・32m）には白色を呈する特徴的な埴輪が供給されるなど、古墳ごとに個性ある製品が並べられる。また、林1号墳（円・15m）では、須恵器のタタキ工具に類したものを用いて底部調整を行う埴輪が存在するといったように、小規模古墳の埴輪生産には異系統の工人が参画した様子も見て取れる。

こうした資料状況からすると、大型前方後円墳の工人集団が全面的に小規模古墳の埴輪づくりに関与していた事態は必ずしも復元できない。加えて、Ⅴ群埴輪の製作が小型品から始まる可能性がある点を踏まえれば（木村2018a）、大型前方後円墳でわずかに存在するⅤ群埴輪は、むしろ小規模古墳の工人集団から製品・技術の供与を受けて製作されたとも考えられる。

以上を踏まえ、大型前方後円墳の埴輪生産が明確な中心性を帯びなくなり、それを介さない個別的な製品・技術の獲得が志向されるようになったことを中期後葉の埴輪生産の特徴として指摘する。この動きはとりわけ古市古墳群で顕著に見られるが、中期前～中葉において段階的に大型前方後円墳を中心とした生産体制が展開してきた姿からすると、不連続性を認めざるをえないのである。

では続いて周辺地域にも目を向けてみよう。大規模な古墳が減少・停止に

むかう中期後葉においては、王権中枢部で以前ほど埴輪を必要としなくなり、工人の上番･帰郷などを介した技術移動の機会は少なくなったと推測される。ただし、古市古墳群では大型前方後円墳が継続して、百舌鳥古墳群でも300m程度の前方後円墳が築かれており、埴輪生産を取り巻く状況が大きく変わるわけでもない。

これを踏まえた上でまず古市古墳群周辺の長原古墳群について見ていく。当古墳群は桜井久之の指摘にある通り（桜井1987）、中期前～中葉において

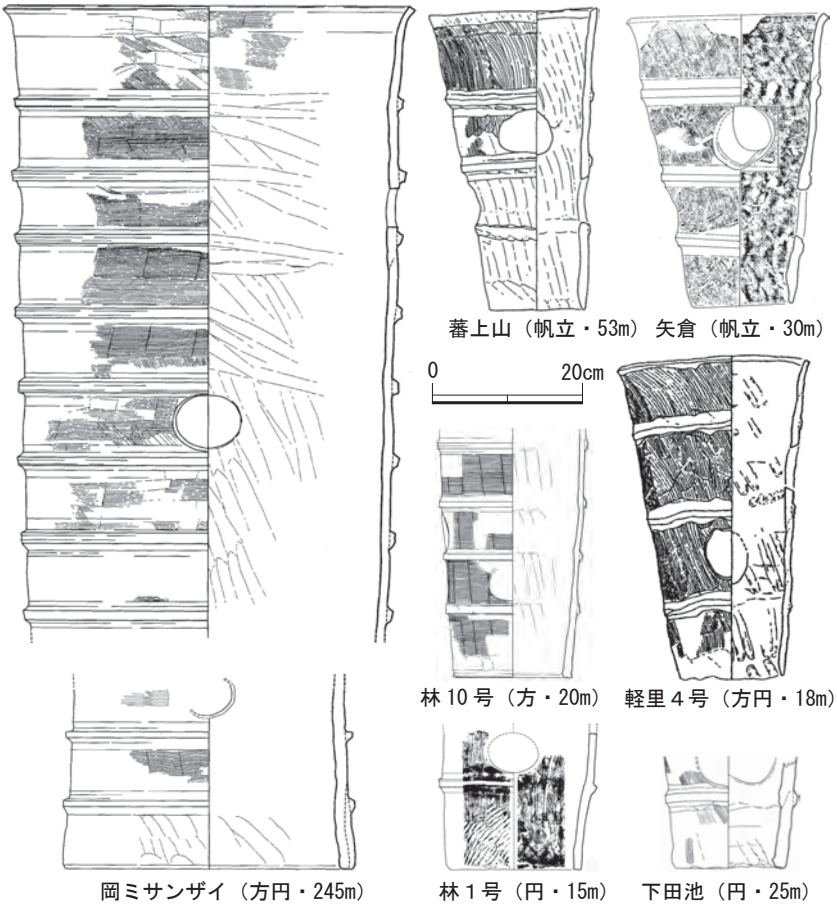

図１　古市古墳群における中期後葉の円筒埴輪

豊富な形象埴輪が樹立され、古市古墳群、中でも大型前方後円墳の埴輪生産との直接的な結びつきが想定できる。実際、円筒埴輪においてもわずかながら存在する貼付口縁や低口縁を呈する大型品は、古市古墳群中の大型前方後円墳や陪冢に類例が求められる。前章の議論に話を戻せば、中期前～中葉において整備された大型前方後円墳を中心とした埴輪生産が古墳群内にとどまらず周辺地域に対しても強い影響力を有していたという理解になるだろう。

たほう、中期後葉に位置づけられる長原5号墳（方･8m）や同132号墳（方･8m）の埴輪は、シャモットを一定量含み、白色を呈する胎土・色調やヘラ記号の類似性から古市古墳群中の青山7号墳出土埴輪に類例が求められる。しかしながら、大型前方後円墳で主体をなすⅣ群埴輪や大型の円筒埴輪はきわめて限定的となり、むしろ長原193号墳（方・規模不明）では1段3方向のスカシ孔を穿つ独自の埴輪が見られる（図2）。また、古市古墳群では卓越しないスカシ孔隣接段タイプ（木村2019a）のものが長原131号墳（方・10m）で出土することも古市古墳群の埴輪との違いとして挙げられる。

なお、これは百舌鳥古墳群の周辺でも同様で、土師ニサンザイ古墳併行期の塔塚古墳（方・45m）では百舌鳥古墳群で製作されない淡輪技法による埴輪が一定量認められる。このように中期後葉になると大型古墳群中で大型前方後円墳が存在しながらも、周辺の古墳は必ずしもその埴輪づくりの影響を

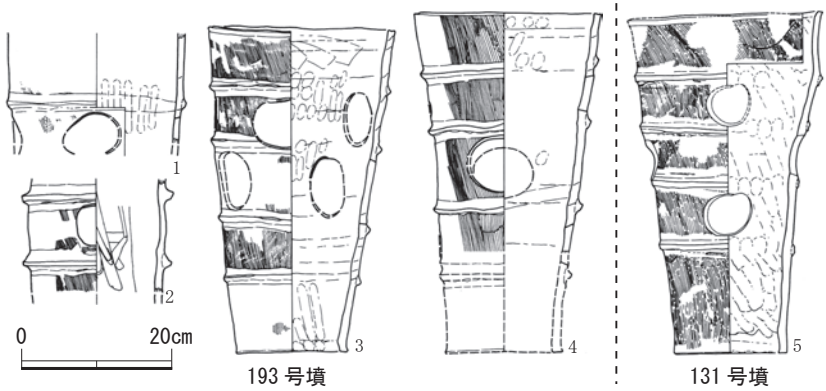

図2　長原古墳群における中期後葉の埴輪

受けなくなる事例が出てくるのである。

さて、この状況を理解する上で、各地でこれまでとは異なる系統の埴輪が中期後葉を境として出現してくることは興味深い。中期から後期にかけての大和盆地の埴輪系統を整理した内藤元太によれば、中期後葉になると盆地南部を中心として回転性の強いヨコハケ、高い底部高のプロポーションなどを特徴とする異系統の埴輪が製作され始めるという（内藤2018）。また、尾張においても、底部内外面回転ケズリやヒモズレ・ユビズレ痕を残す特徴的な製作技法が東山11号窯古段階（TK23型式期）に出現する（藤井2006）。さらに、山陰でも独自の技法をもつ埴輪が当該期から展開する（田中2012など）といったように、各地で地域色が顕在化し始めるのはおおむね中期後葉に求められるのである。

その要因としては各地に埴輪づくりの技術が波及し、地域内での継続的生産を可能にしたことがまず考えられる。一方で、中期後葉以前の古墳築造動向や埴輪生産の多寡は各地で異なっていたと想定されるにもかかわらず、地域色の発現がほぼ同時期から始まる点は重要で、中期後葉という時期が埴輪生産において大きな変革期になっていたと捉えることが許されよう。そして、それは畿内大型古墳群、とりわけ大型前方後円墳を中心として保持されていた技法が、埴輪づくりの規範として必ずしも準拠すべきものとみなされなくなったことに起因しているというのが筆者の理解である。

このように、以前まで製品・技術の上で強い規範性・中心性をもっていた大型前方後円墳の埴輪に対する価値づけやアクセス方法の変化を中期後葉に認めることができるのである。

2. 墳墓階層と埴輪秩序

続いて円筒埴輪の段数構成や形象埴輪の器種組成を検討していこう。まず、円筒埴輪にかんして、市野山古墳および岡ミサンザイ古墳では7～8条程度の大型品が、若子塚古墳（円・20m）や軽里4号墳、葛井寺3号墳（方・13m）などの小規模古墳では多くの場合、3条4段の小型品が採用される。

その点では中期前～中葉との間に大きな相違はない。しかしながら、墳丘規模が大小に二分されることに伴って、大型品と小型品に二極化する傾向が強まるなど段数構成の多様性は大きく減少する（表2）。

こうした中で、方墳で一辺20m程度の林10号墳では4条5段のものが、帆立貝式古墳で53mを測る蕃上山古墳では3条4段のものが採用されるといったように、小型品同士では段数構成の多寡が必ずしも墳丘規模・形態の優劣に応じて設けられない場合も出てくる。[2)] 無論、これは数少ないものではあるが、段数構成の1段分でさえ墳丘規模・形態と高い相関関係を見せていた中期前～中葉とはやや異なる点として積極的に評価すべき事例といえよう。

形象埴輪については人物埴輪や馬形埴輪など中期前葉において創出され、その時期には前方後円墳や陪冢に限定されていた器種が、小規模古墳に対しても比較的豊富に樹立されるようになることが特徴として挙げられる。上述の林10号墳では狭い面積の調査でありながらも、蓋、盾、靫をはじめとする各種器財埴輪に加えて、馬や鶏、人物埴輪がそれぞれ複数個体検出されている。林13号墳（方･不明）でも家、靫、甲冑、馬形埴輪が認められるなど、大型古墳と小型古墳の間で、形象埴輪の器種組成にかんする顕著な差は見出せない。

また、これに加えて、軽里4号墳や矢倉古墳、道端古墳（円・20m）、具足塚古墳（方・15m）において近畿地方の大型前方後円墳で卓越しないとされる石見型埴輪が出土していることは注目すべきで、軽里4号墳の樹立例に見るように独自の埴輪祭式を現出している。この状況は、中期前葉において大型前方後円墳や陪冢で「独占」されていた埴輪祭祀が中小規模古墳にいたるまで共有されるとともに、一部の小規模古墳では地域間交流に基づいて独自性を志向したことを示しているとみるのが素直である。上述の段数構成のあり方と合わせて考えれば、埴輪の質・量・サイズが墳丘規模・形態に基づいて整然と格差づけられていた中期前～中葉に比べ、「許容範囲」が広がった事態を想定するのがふさわしい。

さて、周辺地域の状況を見ていくと、埼玉稲荷山古墳（前方後円・120m、

表２　中期後葉における近畿地方の段数構成

時期	古墳名	形態	規模	地域	7条8段＋	7条8段	6条7段	5条6段	4条5段	3条4段	2条3段
	土師ニサンザイ	方円	300	百舌鳥		■					
	市野山	方円	230	古市		■	■				
	前野山	方円	190	古市		■					
	船宮	方円	91	但馬					■		
	車駕之古址	方円	86	紀伊					■		
	大畑	方円	85	河内						■	
	金津山	帆立	55	摂津					■		
	供養塚	帆立	53	近江		■					
	御願塚	帆立	50	摂津		■					
	青山2	方円	33	古市					■		
	赤塚	帆立	32	南山城						■	
	西馬塚	方	27	古市		■	■				
	北天平塚	方円	30	桜塚						■	
TK208	北山	円	25	玉丘						■	
～	若子塚	円	23	古市						■	
TK23	寛弘寺17号	円	22	河内					■		
	小阪里中	円	21	大和							■
	林10号	方	20	古市					■		
	森向山1号	円	18	但馬					■		
	西車塚南	円	16	河内						■	
	三味頭	方	15	河内						■	
	太田1号	円	15	摂津					■		
	太田2号	円	15	摂津					■		
	上大谷9号	方	14	南山城						■	
	伏尾41-OG	方	10	和泉					■		
	待兼山5号	方	10	摂津						■	
	太秦17号	方	10	河内						■	
	長原61号	方	9	長原						■	
	林13号	方	不明	古市						■	
	岡ミサンザイ	方円	245	古市	■						
	大谷	方円	70	紀伊					■		
	四条7号	円	65	大和						■	
	竜佐山	帆立	61	百舌鳥					■		
	打出小槌	方円	58	摂津						■	
	経塚	帆立	55	和泉					■		
	蕃上山	帆立	53	古市						■	
	佐々木塚	円	40＋	大和					■		
	姫塚	円	40	河内					■		
	太秦高塚	帆立	39	河内						■	
	舞塚1号	方円	39	乙訓					■		
	城1号	方円	37	河内						■	
	矢倉	帆立	30	古市						■	
TK23	大賀世3号	円	30	河内						■	
～	野々井1号	円	26	和泉						■	
TK47	住吉東	帆立	24	摂津						■	
	下田東1号	帆立	21	大和						■	
	軽里４号	方円	18	古市						■	
	寺口忍海D27号	円	16	大和					■		
	五合瀬	円	15	大和						■	
	葛井寺3号	円	13	古市						■	
	吉田二本松8号	方	13＋	山城					■	■	
	長原3号	方	11	長原					■		
	長原131号	方	10	長原						■	
	長原27号	方	7	長原						■	
	池田5号	円?	不明	馬見						■	
	長原193号	方	不明	長原					■		
	大上6号	不明	不明	河内					■		
	大賀世2号	円	不明	河内						■	

武蔵）の6条7段を筆頭として、船宮古墳（前方後円・91m、但馬）や車駕之古址古墳（前方後円・86m、紀伊）、大谷古墳（前方後円・70m、紀伊）で4条5段、それ以外の古墳で3条4段のものが採用されるなど、中期前～中葉から続く秩序が見出せる。ただし、中には太田1号墳（円・15m）や太田2号墳（円・15m）、吉田二本松8号墳（方・13m）、長原3号墳（方・11m）、伏尾41-OG古墳（方・10m）、長原193号墳（方・規模不明）のような小規模古墳に対して4条5段の埴輪が供給されるなど、墳丘規模・形態と段数構成が必ずしも対応関係を示さない場合も認められる（図3）。また、供養塚古墳（帆立貝式・53m、近江）や御願塚古墳（帆立貝式・50m、摂津）に樹立される最大7条8段の埴輪も、中期前～中葉において周辺地域で採用される段数の上限を大きく上回っている。このような事態は、周辺地域の小規模古墳が古市古墳群の古墳よりも高い段数の円筒埴輪を採用するという状況をも生じさせ、その逆の傾向にあった中期前～中葉と比べれば歴然とした差と捉えられる。

以上より王権中枢部、周辺地域とも円筒埴輪の段数構成や形象埴輪の器種組成が墳丘規模・形態の優劣に応じて多様に使い分けられていた中期前～中葉、こうした状況がやや潜在化し、墳墓階層に対して用いることのできる埴

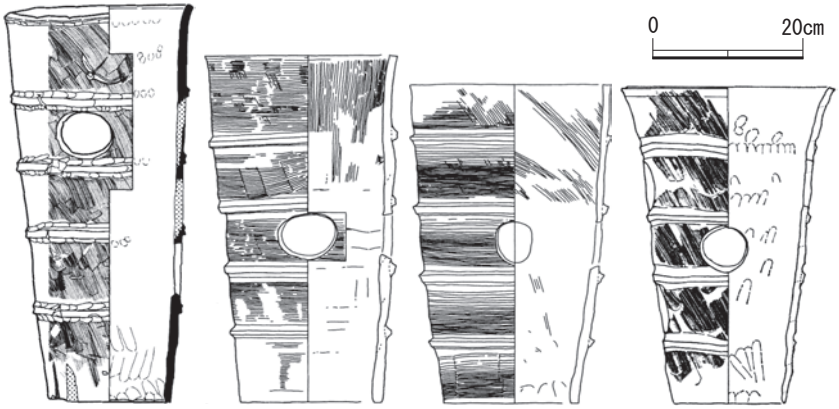

図3　小規模古墳における中型円筒の供給例

輪のサイズや器種の許容範囲が広がる中期後葉という2相が見て取れる。当該期に出現するⅣ群系の埴輪が墳丘規模・形態とも多様な古墳を包摂して一律に2条3段をとることも、当規格の埴輪が盟主墳の下位に位置づけられる形で使用されていた中期前～中葉とは異なる現象といえる。

3. 小結

上では、埴輪生産および樹立埴輪を墳墓階層や大型前方後円墳と結びつけて検討し、大型前方後円墳を中心とした秩序・規範が中期前～中葉に比してやや弱まっている可能性に言及した。無論、円筒埴輪の段数構成や形象埴輪の組成・配置の大枠が大きくは変わらないため、埴輪を取り巻く秩序が根本的に損なわれたとは考えられない。しかし、筆者が強調したいのは、大型前方後円墳を中心として「発展的」に整備されてきた埴輪をめぐる秩序が、そのまま後期へとつながるわけではなく、この中期後葉という時期にこれまでと同程度には機能しなくなっていた可能性があるということである。[3)] 中期前～中葉における埴輪生産の大規模化や恒常化が、製作の省力化を志向させ、結果的に埴輪の供献品もしくは墳墓祭祀の道具としての意義を失わせたこと

表3　古墳出土の焼成不良製品

時期	古墳名	墳形	規模	地域	状態	段数構成	備考
TK216	百舌鳥御廟山	方円	203	百舌鳥	歪み,裂け	6条7段	朝顔形に限られる
TK208～23	船宮	方円	91	但馬	歪み	4条5段	
	青山2号	帆立	33	古市	歪み	4条5段	
	若子塚	円	20	古市	歪み	3条4段	
	葛井寺1号	円	10	古市	歪み,裂け	3条4段	
	伏尾41-0G	方	10	和泉	歪み	4条5段	
	上人ヶ平9号	方	11	南山城	歪み	3条4段？	
TK23	姫塚	円?	40	河内	歪み	4条5段	
	野々井南12号	帆立	30	和泉	歪み	—	
	北山	円	25	玉丘	歪み	3条4段	
	林10号	方	20	古市	歪み,剥離	4条5段	器面一部が剥離
TK47	大谷	方円	70	紀伊	歪み	4条5段	
	長原131号	方	10	河内	歪み	3条4段,4条5段	
	徳雲寺北6号	台形	12×6.5	丹波	歪み,裂け	3条4段	
	火山3号	円	12	丹波	裂け	3条4段？	
	長岡宮第73次	不明	不明	乙訓	歪み	—	
MT15～TK10	水晶塚	帆立	50	大和	歪み	4条5段	
	青谷石神1号	方円	37	南山城	歪み	4条5段?	
	野々池7号	帆立	28	播磨	歪み	3条4段	
	南山117号	円	18	南山城	歪み	—	
	堀切7号	円	15	南山城	歪み,裂け	2条3段	尾張型

は想像にかたくない。また、市野山古墳併行期以降、焼成の失敗により大きく歪んだり、裂けたりした埴輪であっても古墳へ供給されるようになる（表3）ことも同様の背景で説明しうる。つまり、中期後葉は埴輪の秩序が強化される時期というよりもむしろ、それに対する意味づけが低下した時期と捉えられるのである。

こうした理解は政治権力と埴輪生産が一定の関係を保ちながら後期へ至るという既往の見解とは異なり、両者の結びつきには強弱の波があることを示すものである。

第4章　後期前葉における埴輪生産

古墳時代中期の埴輪生産や埴輪をめぐる秩序は一様、もしくは一方向的に整備されていくわけでなく、変化に富むということを述べてきた。以下では、この様相を評価するため、後期前葉のあり方を検討したい。

まず、埴輪生産にかんして、地域の実態に即して多様な体制がとられていたと推察される中で、大和盆地や乙訓地域など王権中枢部では、地域内部で継続して生産に携わる工人集団が存在しつつ、点的には地域外部との結びつきによって技術獲得が行われていたと考えられる（東影2018）。乙訓地域で特定の工人が複数の古墳の埴輪製作に従事する様相が見て取れる（原田2017）ほか、大和においても特定の技術を保有した工人集団が一定地域ごとに存在した可能性が示唆されている（廣瀬2019）点はこれに整合的である。

さらに近年、「今城塚古墳の為に設けられた大王墓専用の埴輪窯」（花熊2018：p.18）とされた三島の新池埴輪窯について、今城塚古墳では出土しないような3条4段程度のⅤ群埴輪や石見型埴輪が一定数見られることから、筆者は地域内の中小規模古墳へも埴輪を供給した可能性が高いと想定している。無論、Ⅴ群埴輪の出土数は今城塚古墳所用の埴輪に比して少ないことから生産量はさほど多くなかったと推察される。しかしながら、新池埴輪窯でのこれらの埴輪の僅少さは、中小規模古墳で必要な埴輪の総量の少なさを踏

まえれば当然であり、また未調査範囲も多い当窯にあってはむしろ出土していること自体を積極的に評価すべきといえる。こうした点から三島地域にかんしても、新池埴輪窯を中心として近隣の複数の古墳へ埴輪を供給する体制が整えられていたとみた方が実態に即している。

たほう、当該期の埴輪生産が全て地域内部で完結するわけではないことも強調しておく必要がある。例えば、円筒埴輪の口縁端部に粘土紐を貼り付けるものや、最下段突帯に断続ナデ技法Bを用いるものは、各地の有力古墳で点的に出土している。また、蓋形埴輪の軸部倒立技法、靫形埴輪2類の鏃部拡張式、家形埴輪の分割焼成技法もこれらと同様で、とりわけ今城塚古墳を中心として分布している（青柳2007、和田2017、木村2018c）。つまり、上の議論と合わせれば、地域内部で相互関連的な生産体制がとられつつも、その中の有力首長は地域外部との結びつきに基づいて独自に技術獲得を行っていたという理解ができるのである。なお、今城塚古墳で行われるような堤上での形象埴輪配置が、関東地方や愛知県味美二子山古墳（前方後円・94m）、宮崎県百足塚古墳（前方後円・80m）など各地の有力古墳の間で共有されている（高橋2004、犬木2007など）ことも、近畿地方の有力者を起点とした首長間の広域ネットワークの存在を推測させる。東影も指摘する通り、このような重層的なネットワークが当該期の特色といえよう。

続いて段数構成についてであるが、中期後葉においてはさほど存在しなかった多条の円筒埴輪が、今城塚古墳以外にも大和の小墓古墳（前方後円・80m）や市尾墓山古墳（前方後円・66m）、吉備の二万大塚古墳（前方後円・38m）や十六夜山古墳（前方後円・60m）、上野の七輿山古墳（前方後円・150m）や綿貫観音山古墳（前方後円・97m）、常陸の舟塚古墳（前方後円墳・72m）などで樹立され、再び段数構成の多様化がおきるとともに、ほかの中小規模古墳との間に格差が設けられるようになる。そして、これら大型品が供給される古墳でも、墳丘長200m程度の今城塚古墳では6条7段や7条8段のものに加えて10条を越える特大品、150m程度の七輿山古墳では7条8段、60～100m程度の綿貫観音山古墳や舟塚古墳、小墓古墳、市尾墓山古墳では

6条7段、十六夜山古墳など50m程度の古墳では5条6段のものが樹立されるといったように、墳丘規模に応じて再び多様な段数構成が使い分けられるのである。

また、これらの古墳では、今城塚古墳で出土する特徴的な形象埴輪や貼付口縁を有する円筒埴輪が少なからず認められる。筆者はここに、今城塚古墳を核として緩やかながらも有力首長同士で埴輪の技術･形態の供与が行われ、大型の埴輪を用いて再び埴輪祭祀の規模・質差を明示することが企図された状況を想定したいのである。なお、それ以外の中小規模古墳においても、有力古墳で用いられる多条の埴輪を頂点として、小型の埴輪が墳墓階層に基づいて再び広域的に秩序立てられていた可能性が指摘されている（廣瀬2019）。

以上の事象は生産、そして段数構成や形象埴輪の組成・配置において再び大型前方後円墳の果たす役割が大きくなり、それを中心とした秩序が整えられるようになる過程を描き出しているとみてもよいだろう。大型前方後円墳を頂点として埴輪祭祀の規模や質の違いを表出することが、墳墓祭祀の中で再度大きな意義をもつ時期であったことを強調しておきたい。

第5章　埴輪生産の変遷と諸段階

以上、中期後葉を中心としてその前後の時期の検討から、埴輪をめぐる秩序が墳墓階層に強く規定される時期と､やや弱まる時期があることを指摘し、政治権力と埴輪が常に一定の関係を保っていたわけではないと結論づけた。具体的には、中期前～中葉および後期前葉に比して中期後葉は相対的に埴輪と墳墓階層の対応関係が弱まるとみている。以下では、こうした点も踏まえて、埴輪生産の段階設定を行いたい（図4）。

第1段階（前期前葉～中葉）　個別的な埴輪生産を基本とすることに加え、埴輪のサイズや器種組成の差が墳墓階層の違いと必ずしも対応しない。

こうしたあり方は、埴輪が特殊器台から成立したという経緯を踏まえれば

自然なことで、墳墓上での「供献」意識が強く働くとともに、被葬者が有するネットワークや系譜に基づいて比較的自由な祭祀が執り行われていたと推測できる。埴輪を通じて行われる祭祀の規模や方式の違いが有力者同士の関係性によって規定されていたというよりも、有力者自身の系譜意識や則るべき祭祀が比較的自由に決められていたと捉えられる。

第2段階（前期後葉～中期初頭）　大型前方後円墳を中心とした拠点的な生産体制がとられる一方で、埴輪のサイズや器種組成の差が墳墓階層の違いと必ずしも連関しない。

前者について、円筒埴輪および器財埴輪の定型化とともに進められた拠点的な生産体制は、生産組織の成熟や有力者同士の関係性の強化により達成されつつ、古墳同士で共通した埴輪祭祀・墳墓景観を創出する意図をもって実現されたと考えられる。第1段階における埴輪祭祀の自由度は低下し、その標準化が実現された時期と捉えられるのである。一方で、このようにして標準化された埴輪祭祀に質・量の差を設けて、それを階層表示の手段へと転化させる様は明確には見えてこない。中期前～中葉との相違はそこにあり、埴輪が墳墓階層を表出するものではないというⅠ群埴輪以来の観念や、当段階における隔絶した王権の不在という状況がその要因であった可能性を想定できる。[4)]

第3段階（中期前葉～中葉）　大型前方後円墳を中心とした拠点的な生産体制がとられ、かつ埴輪のサイズや器種組成が墳墓階層の違いと明確に結びついて多様に使い分けられる。

有力者の政治的関係を表示する手段として墳墓外表での祭祀の果たす役割が大きくなったことが、そこで用いる祭祀具の生産の拡充化や序列化された墳墓祭祀、墳墓景観の必要性を生じさせ、こうしたあり方へ結びついたと考えられる。さらにいえば、大型前方後円墳の造営主体が有する高い求心力と、生産組織の成熟によって達成された埴輪生産の一元化が、結果として各古墳の埴輪を生産レベルから管理し、墳墓祭祀や墳墓景観の質・量を合理的に差配するのに寄与したとも理解できよう。埴輪祭祀のもつ意義がきわめて大き

くなり、政治権力と最も強い結びつきを有した段階として位置づけられる。

なお、こうした方針は古市・佐紀古墳群においてまず小規模古墳を取り込むことから始められ、その後、百舌鳥古墳群と馬見古墳群で整備されたとみられる。特に、中期前葉の古市古墳群や佐紀古墳群では既存の円筒埴輪を刷新してまでも手の込んだつくりの形態が内的に創出・採用されるほか、人物や動物をはじめとした新たな形象埴輪の初現例が多く認められる。したがって、埴輪生産や埴輪様式の整備は畿内大型古墳群の中でも古市・佐紀古墳群に主導される形で実現したとみるのが適切である。

第4段階（中期後葉） 大型前方後円墳の埴輪生産が必ずしも製品・技術の中心とならず、周辺古墳で個別的に製品・技術を獲得する傾向が強まる。また、埴輪のサイズや器種組成の差が墳墓階層と連関しつつも、その秩序の貫徹度合いは第3段階に比べやや弱まる。

前段階との対比でいえば、有力者相互の関係性を示す手段として埴輪が必ずしも重視されなくなった、そして大型前方後円墳の造営主体が有する政治・経済活動がそこに発揮されなくなったという、埴輪に対する一時的な価値づけの低下が想定できる。第3段階における大量生産に伴う省力化への志向や、当段階における須恵器工人をはじめとした別系統の工人の参画が埴輪の質や埴輪づくりの意味合いを変えた可能性も考えられる。しかしながら、大型前方後円墳が急速に規模を縮小させる点や、各地で前方後円墳が減少し、墳丘規模・形態の多様性に基づいた社会関係の表示が十分になされなくなる点、葺石の簡略化・陪冢の減少などにより墳墓景観が簡素になる点などを踏まえれば、これは社会全体の中で許容もしくは意図された変化として捉えるべきであろう。墳墓外表での祭祀を通じて有力者同士の関係性を示すことが一時的に意義を低下させたと考えられる。古墳時代が墳丘規模や形態、そしてそこで執り行われる各種祭祀の規模や質の違いによって有力者同士の関係性を示す時代と見るならば、当段階はある意味で「古墳時代が終わりかけていた」とも表現できるのである。

第5段階（後期前葉） 小地域内では相互関連的な生産がとられつつ、有

力首長同士では地域間での技術供与もなされる。また、墳墓階層の違いに応じて多様な埴輪が系統を越えて再び意図をもって使い分けられる。この状況

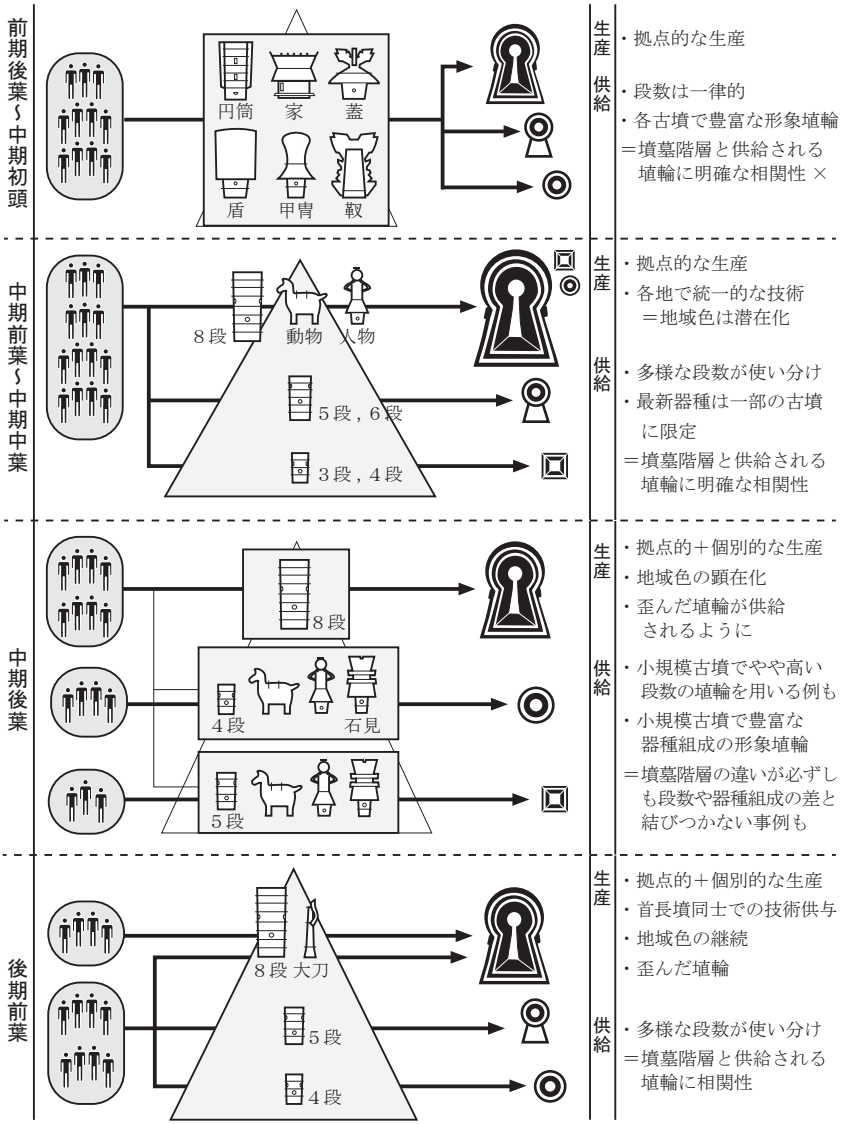

図4　埴輪生産の変遷と諸段階

は、一元的に生産されていた製品を用いて秩序の構築を図る中期前～中葉や、生産が多元化したことに伴って秩序自体もやや緩む中期後葉とは異なり、埴輪全体の管理体制としては高次元なものであったといえる。

前方後円墳の「復活」現象（福永2004）が示すように、当該期は古墳を通じて有力者同士の関係を表示することが再び強く企図された時期であった。埴輪が再び強くコントロールされる背景には、権力生成の場の1つとして墳丘上での祭祀や墳墓景観に再度大きな意義が与えられた可能性を読み取ることができるだろう。

第6段階（後期中葉～後葉）　有力首長同士の結びつきに基づいて製品・技術の供与がなされつつ、大型前方後円墳や大型方墳であっても埴輪を具備しないものが出現するなど、埴輪が社会階層によって規定される状況は見出せない。また、埴輪の多くは横穴式石室の羨道や前庭部に配置され、埴輪の使用方法にも大きな変化が認められる。

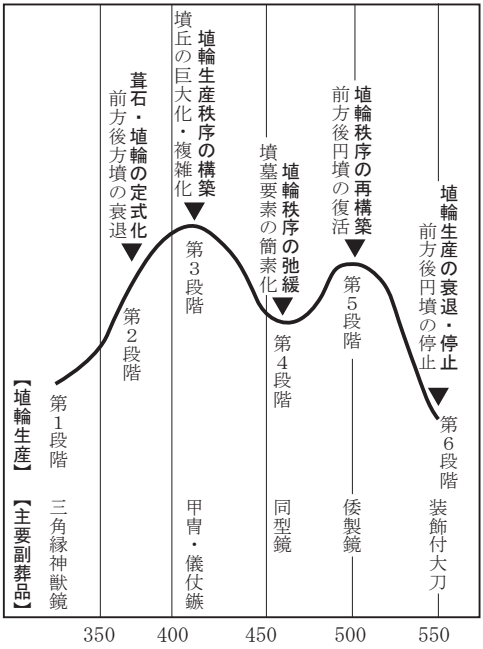

図5　古墳時代の墳墓戦略の変遷

この要因として、墳丘外表面で行われる埴輪祭祀、さらにそこに広がる景観の違いが有力者同士の社会階層の差を示す手段として大きく役割を減じたことが考えられる。つまり、社会階層の違いを、墳墓外表面で行われる祭祀の規模・質差によって明示する「戦略」は役目を終えたと推考されるのである（図5）。墳丘内部で行われる横穴式石室の祭祀が墳墓祭祀としての地位を高めたこと、社会階層の一定程度の固定化により墳墓で

の可視化を必要としなくなったこと、新たな墓制が導入されたことなどが複雑に入り組む状況を想定しうる。

さて、埴輪生産の変遷を跡づけ、予察的ながらその背景にある社会的位相についても言及してきた。埴輪の検討が明らかにするのは、古墳外表での祭祀方式やそれにかかる祭祀具調達システムであるが、それらは時期によって変化に富むことがわかる。継続的に古墳が築かれる中で、そこで行われる祭祀の意義づけが一定もしくは一方向的に変遷を遂げたとは限らないことを考慮しておくのもまた肝要なのである。

おわりに

本稿では中期後葉の埴輪の位置づけをめぐって検討を進め、政治権力と埴輪は後期にいたるまで結びつきを有しつつも、常に一定の関係を保っていたわけではないと結論づけた。こうした理解は、これまで「中期」と「後期」という二項軸で比較されることの多かった既往の研究とは異なり、中期の中でも変化に富むことを提起するものである。そして、埴輪を媒介として行われる墳丘上での祭祀が、権力資源として活用される時期には波があるということを示した。

一方で、このあり方を現出した社会の実像を多角的に復元するには至らなかった。この点については、ほかの墳丘施設や副葬品、埋葬施設の議論を踏まえた上で別稿にて論ずることとしたい。

本稿は日本学術振興会特別研究員奨励費課題番号17J01126の助成を受けたものである。

［注］

1）　中期前～中葉においても時期によって採用される円筒埴輪の段数構成や形態には推移が認められるため、墳丘形態・規模と段数構成の関係が固定化されているわけではない。
2）　蕃上山古墳では確実に伴うかは不明なものの、中型の円筒埴輪も認められており、その点では林 10 号墳との間に差異が設けられていた可能性も考慮すべきといえる。ただし、共伴遺物であるかは慎重に判断する必要がある。
3）　ただし、群馬県保渡田八幡塚古墳の埴輪配置の例に見るように、当該期の大型前方後円墳でとられていた埴輪配置が遠隔地にまで影響を及ぼしていた可能性はある。大型前方後円墳を築くような有力者同士でのネットワークは存在していたことも想定しておくべきではあろう。
4）　新たな形象埴輪の創出が必ずしも王権中枢古墳群で行われるとは限らない例（東影 2016）もこれを傍証している。

［参考文献］

青柳泰介　2007「家形埴輪の製作技法について再論」『埴輪論考』Ⅰ　大阪大谷大学博物館：pp.133-152
天野末喜ほか編　1998『石川流域遺跡群発掘調査報告』Ⅻ　藤井寺市教育委員会
犬木努　2007「形象埴輪「列状配置」の本義―「今城塚」から東国の埴輪を考える―」『志學臺考古』第 7 号　大阪大谷大学文化財学科：pp.1-21
内記理編　2015『京都大学構内遺跡発掘調査年報』2013 年度　京都大学文化財総合研究センター
宇野隆志　2018「埴輪の生産と流通」『畿内乙訓古墳群を読み解く』季刊考古学・別冊 26　雄山閣：pp.96-105
笠井敏光ほか編　1988『古市遺跡群』Ⅸ　羽曳野市教育委員会
木村理　2018a「古墳時代中期における古市古墳群出土埴輪の系統と生産」『考古学研究』第 65 巻第 1 号　考古学研究会：pp.55-76
木村理　2018b「盾塚・鞍塚・珠金塚古墳出土埴輪の検討とその歴史的評価」『待兼山考古学論集』Ⅲ　大阪大学考古学研究室：pp.427-440
木村理　2018c「古墳時代後期大和における蓋形埴輪の生産体制」『埴輪論叢』第 8 号　埴輪検討会：pp.173-183
木村理　2019a「百舌鳥古墳群における埴輪生産の展開―窖窯焼成導入以降を中心として―」『古代学研究』第 220 号　古代学研究会：pp.13-29

木村理　2019b「馬見古墳群の埴輪生産からみた畿内大型古墳群の特質」『埴輪論叢』第 9 号　埴輪検討会：pp.1-15
黒須靖之編　2015『太田遺跡発掘調査概報』茨木市教育委員会
桜井久之　1987「埴輪と中・小規模古墳」『季刊考古学』第 20 号　雄山閣：pp.43-48
桜井久之編　1993『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ　大阪市文化財協会
佐々木理編　2014『仲哀天皇陵古墳』藤井寺市教育委員会
新開義夫編　2000『石川流域遺跡群発掘調査報告』Ⅳ　藤井寺市教育委員会
高橋克壽　1994「埴輪生産の展開」『考古学研究』41 巻第 2 号　考古学研究会：pp.27-48
高橋克壽　2004「埴輪まつりのうつりかわりと今城塚古墳」『発掘された埴輪群と今城塚古墳』高槻市立しろあと歴史館：pp.56-64
田中大　2012「山陰地域における古墳時代後期円筒埴輪の様相」『後期埴輪の特質とその地域的展開』中四国前方後円墳研究会・第 15 回研究集会実行委員会：pp.21-32
内藤元太　2018「大和南部を主眼とする後期円筒埴輪の系統」『埴輪論叢』第 8 号　埴輪検討会：pp.159-171
花熊祐基　2018「摂津における埴輪生産の変遷と展開」『ヒストリア』第 271 号　大阪歴史学会：pp.1-25
原田昌浩　2017「京都盆地北部における古墳時代後期の埴輪生産」『埴輪論叢』第 7 号　埴輪検討会：pp.149-166
東影悠　2010「形象埴輪の製作技術―形象基部倒立技法の研究―」『待兼山考古学論集Ⅱ―大阪大学考古学研究室 20 周年記念論集―』大阪大学考古学研究室：pp.539-556
東影悠　2016「大園遺跡出土埴輪の生産・供給体制と中期的埴輪様式の系譜」『日本考古学協会第 82 回総会研究発表要旨』日本考古学協会：pp.108-109
東影悠　2018「古墳時代後期における埴輪生産と埴輪様式の特質」『ヒストリア』第 271 号　大阪歴史学会：pp.26-53
廣瀬覚　2007「巨大古墳の埴輪生産組織像―神戸市五色塚古墳の検討から―」『埴輪論考』Ⅰ　大阪大谷大学博物館：pp.25-49
廣瀬覚　2019「埴輪の生産・流通からみた古墳時代の権力生成」『権力とは何か―生産と流通から考える―』考古学研究会第 65 回総会・研究集会資料　考古学研究会
福永伸哉　2004「近畿北部地域における前方後円墳の展開と消滅過程」『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』大阪大学大学院文学研究科：pp.55-66
藤井幸司　2003「円筒埴輪製作技術の復元的研究」『埴輪―円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析―』第 52 回埋蔵文化財研究集会：pp.31-62

藤井康孝　2006「尾張における円筒埴輪の変遷と「猿投型円筒埴輪」―「尾張型埴輪」の再構築―」『埴輪研究会誌』第 10 号　埴輪研究会：pp.82-100
藤沢真依　1978「1. 古墳時代の遺構　（一）古墳」『長原』大阪文化財センター：pp.115-168
藤永昭ほか編　1981『林遺跡発掘調査概要』Ⅲ　大阪府教育委員会
松本百合子編　1997『長原・瓜破遺跡発掘調査報告書』Ⅺ　大阪市文化財協会
三木弘ほか　2015「和泉地域における古墳時代前期の埴輪生産」『大阪府立近つ飛鳥博物館館報』18　大阪府立近つ飛鳥博物館：pp.13-32
山田俊輔　2008「雄略朝期における地域支配」『史館』第 158 冊　市川ジャーナル：pp.100-115
和田一之輔　2005「摂津猪名川流域における古墳時代後期の埴輪供給関係」『待兼山考古学論集―都出比呂志先生退任記念―』大阪大学考古学研究室：pp.671-696
和田一之輔　2017「近畿地方における靫形埴輪 2 類の展開と背景」『古代文化』第 68 巻第 4 号　古代学協会：pp.19-38

［図表の出典］

図 1：佐々木編 2014・藤井 2003・笠井ほか編 1988・天野ほか編 1998・藤永編 1981・新開編 2000 ／図 2：桜井編 1993・松本編 1997 ／図 3：黒須編 2015・内記編 2015・藤沢 1978 ／図 4：筆者作成／表 1 ～ 3：筆者作成

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

Stages in the Development of Kofun-period *haniwa* Production

Osamu KIMURA

In this paper, the author analyzes the production of cylindrical *haniwa* during the Kofun period and clarifies several significant stages therein. The author suggests that the relationship between *haniwa* and political power was neither constant nor did it progressively grow, but rather differed significantly by phase. Specifically, while the relationship between *haniwa* and political power during the first half of the Middle Kofun period was strong, the relationship weakened toward the end of Middle Kofun period, only to strengthen once again from the beginning of the Late Kofun period. These results indicate that the method of generating power through *haniwa* changed by phase.